F-2　日本語オノマトペの統語転換現象に対する認知言語学的アプローチ

―副詞・動詞・形容動詞が名詞になる場合―

朴智娟（名古屋大学大学院／日本学術振興会特別研究員）

1.　はじめに

日本語オノマトペの統語範疇は、副詞、動詞、形容動詞が典型的とされる（田守・スコウラップ 1999）。しかし、われわれの日常生活では、以下の (1a-c) のような表現が頻繁に観察される（いずれも筆者による作例）。

(1) a. 金魚鉢に新しく買ったぶくぶくを入れました。
　　b. 問題になっていたサッシ部分のびしゃびしゃがなくなりました。
　　c. 京都はぶらぶらが楽しい町です。

(1a-c) のような名詞オノマトペは、従来、育児語や具体物を指示する一部のもの（例：「わんわん」「がちゃがちゃ」）は、あまり一般的ではないとされ、ほとんど注目されなかった。本研究では、以上のような表現を、統語転換 (conversion) したものと捉える。統語転換とは、既に存在していたある語が、形態的派生を伴わずに統語範疇の変化を起こす非連結的 (non-concatentive) 過程のことをいう（例：to *run*→a *run*）(Bauer 1983)。本研究では、これまで本格的に議論されることのなかった名詞オノマトペを取り上げ、統語転換後の意味の分布状況や意味形成の仕組みを明らかにすることを目的とする。具体的には、フレーム意味論から名詞オノマトペの意味を検討し、フレームの一部分を指すもの、フレーム全体を総括的に捉えるものに分かれることを示す。また、オノマトペ本来の意味的特質や個別言語の表現構造が、名詞転換を可能にする背景要因であることを主張する。

2.　先行研究の概観

2.1.　名詞用法のオノマトペに関する先行研究

育児語（例：「ちゅんちゅん」＜スズメ＞、「ぽんぽん」＜お腹＞）（例：「ひらひら」＜スカートなどの衣類に付いているレース＞）の一部に、名詞用法として用いられるオノマトペが存在するということは、既に多くの学者の間で認められている（Akita 2009; 田守・スコウラップ 1999; 友定 2005; 游 2014）。更に、擬音語から転換したもの（例：「ころころ」＜掃除道具＞、「もーもー」＜牛＞）については、音から音源そのものを指示するという意味変化の方向性が指摘されている（遊 2014）。また、「その＋オノマトペ」の構造が先行詞の言い換えとして用いられることも言及されている（例：「そのひらひらが…」）（虎谷 2014）。しかし、既存の研究では、これらの語が名詞用法として用いられる際、どのような意味変化を起こすのか、またその動機づけになっているのは何かについては深く考察されていない。また、限られた少数の語のみが対象になっているため、その使用実

態の把握が難しいという課題が残る。

2.2. フレーム意味論

一般に語の意味は、語そのものが表す辞書的意味に加え、その語と何らかの関連性のある日常経験、習慣、文化といった様々な背景的情報により解釈される。フレーム意味論は、語に関する背景知識、すなわち語の百科事典的知識 (encyclopedic knowledge) から語の意味を捉えようとする認知言語学分野の理論である。われわれの日常経験が一般化した、複数の意味要素が統合された知識の型を「フレーム」といい（籾山 2014: 37）、語のフレームは、ある語にまつわる身体経験や状況などその語によって喚起されるあらゆる知識の総体を指す。

3. 研究方法

研究対象は、辞書（『擬音語擬態語使い方辞典』）の見出し語として登録されている738語とした。データの採集は、コーパスやウェブ検索エンジンを用い、「オノマトペ＋助詞」の構造で用いられたもの（例：「ぱちぱちが／を／は」）を対象に行った。採集されたものに対し、名詞転換前後でどのような意味変化を見せるのかを、辞書の意味記述や文脈情報、母語話者の判断を総合的に参考にして分析を行った。

4. 分析結果

観察の結果、計266語において名詞用法が観察された。転換前のオノマトペの意味は、音、様態、状態、程度、頻度を表すものに下位分類される。しかし、転換後は、音を放出する音源を指すもの、ある性質を持つ実物の一部分を指すもの、ある特性を持つ実物自体を指すもの、行為全体を指すもの、語にまつわる様々な背景的情報まで幅広く捉えるものがあるということがわかった。これらのものは、文脈依存性が高く、当該オノマトペが本来どのような意味を表すのか、また文中でどのような成分と共起するのかによって、意味解釈が左右される。以下の (4) から (8) にそれぞれ具体例を示す。

(4) 赤ちゃん用のガラガラは、手足にはめるタイプや掴んで振るタイプなど色々な種類があり、…（音源を指すもの）

<https://www.chiikunote.com/entry/garagara>

(5) 時間をおくと昆布のねばねばがきゅうりに絡んでおいしいんです。（ある性質を持つ実物の一部分を指すもの）

<http://www.kane7.co.jp/recipe/fukusai/post_2.html>

(6) はい、ホールにいる色白のひょろひょろがぼくです。（ある特性を持つ人自体を指すもの）

<http://www.wonderland.gr.jp/fk-higashi/9006.html>

(7) くちゃくちゃをやめようと思ったら口を閉じて息をとめるしかないんです。（行為を指すもの）

<https://www.haru-dental.com/official-blog/1982>

(8) 失敗したらどうしようと考えてしまうと、緊張してドキドキが止まらないなど、自分では制御できない不安感や緊張感に悩んでいる人もいらっしゃると思います。（状況や事象を指すもの）
<https://www.huffingtonpost.jp/toshio-tanabe/heart_solution_b_12596368.html>

(4) の「がらがら」は、擬音語で音の発生源になる実物自体、つまり音源を指している。この他にも擬音語で音源を指示するものは、育児語の動物を指示するものにおいて多く見られる（例：「ちゅんちゅん」＜すずめ＞、Akita 2009; Hamano 1998; 友定 2005; 游 2014）。「ねばねば」は、ものに粘り気のある様子を表すが、(5) では昆布についた粘液の付着物を指している。「ひょろひょろ」は、細長い人がおぼつかない足取りで歩く様子を表すが、(6) では、細長い体形を持つ人そのものを指している。(7) の「くちゃくちゃ」は、擬音語で音を発生させる咀嚼の行為全体を指している。「どきどき」は心臓の鼓動を表すが、(8) では、そのような状況を引き起こす心理的、感情的要因まで総括して表している。以上の用例を語のフレームから考えると、(4) から (6) は、フレーム内におけるフレーム要素間の転移が起こり、転換後にフレームの一部分へと焦点が移行している。一方、(7) と (8) は、転換後に語のフレーム全体を指している。この場合は、転換前と転換後で大きな意味変化は見られない。

5. 考察

5.1. なぜ日本語のオノマトペ体系では名詞転換が起こりやすいのか。

5.1.1. オノマトペ体系の意味的特性の要因

オノマトペは、その語と関係する様々な事象を生き生きと喚起する (Kita 1997)。喚起される事象は、かなり具体的で、精緻化の度合いが高い（秋田 2013a, 2013b）。例えば、「とぼとぼ」というオノマトペは、「歩く」という事象を漠然と捉えるのではなく、歩調、歩幅、速度など歩行に関わる様々な様子を喚起する。更に、その背景となる主体の身体的、感情的な状況（疲労感、怪我などによる不具合など）までも想起させる。すなわち、オノマトペが喚起する事象は、意味的特定性が高い (Park 2018)。オノマトペの高い意味的特定性は、語のフレーム内における焦点の転移先を豊富にするため、結果的に意味変化が起こりやすい（遊 2014; Clark & Clark 1979も参照）。オノマトペの豊富な意味要素とその高い意味的特定性は、話し手と聞き手が今現在の状況を詳細に描写、理解することに重要な役割を果たす。こうした意味的特性が、オノマトペ体系において名詞転換を起こしやすくする要因の1つであると考えられる。

5.1.2. 日本語特有の表現構造の要因

前節では、オノマトペ体系の意味的特性が、統語転換を引き起こす1つの要因であると述べた。それでは、他言語のオノマトペ体系でも日本語で見るような名詞転換が起こりやすいのか。日本語オノマトペと類似する統語範疇を持つ韓国語オノマトペでは、名詞転換が非常に制限される。本研究で観察された日本語のオノマトペ名詞を韓国語に直訳すると、非文になるか、あるいは極めて不自然な表現

になってしまう。韓国語では、オノマトペ動詞あるいは形容詞を形成し、名詞句を用いる必要がある。また、物・人を指示する場合は、指小辞-*i*＜ちゃん、さん＞と結合しなければならない。以下の (9) は、(6) の日本語の用例を韓国語訳したものである。

(9) a. **Hol-ey iss-nun huy-n phipwu-uy pisilpisil-i ce-i-pnita.*
ホール-場所格 いる-連体形 白い-連体形 肌-属格 オノマトペ-主格 わたし-コピュラ-平叙文（上称）
（ホールにいる白い肌のひょろひょろがわたしです。）

b. *Hol-ey iss-nun huy-n phipwu-uy {**pisil**-i-ka/*
ホール いる-連体形 白い-連体形 肌-属格 オノマトペ-指小辞-主格／
***pisilpisil**-ha-n salam-i} ce-i-pnita.*
オノマトペ-*hata*接尾辞-連体形 人-主格 わたし-コピュラ-平叙文（上称）
（ホールにいる白い肌の｛ひょろひょろする者が／ひょろひょろした人が｝わたしです。）

以上からわかるように、日本語の口語性の高い文脈では、名詞転換への許容度が高く、あらゆるオノマトペを名詞用法として用いることができる。しかし、同様のことが韓国語では許されず、オノマトペ動詞または形容詞といった述語形式や、実質的な意味を持つ名詞を用いて事象を表す必要がある。日本語でも (9b) のような表現は文法的に許容されうるが、実際の発話場面では (6) のような表現も問題なく許容される。つまり、韓国語オノマトペは、日本語オノマトペに比べ、事象にまつわる諸々の要素を言語表現として分析的に捉え、顕在化する。

こうした表現上の違いを、日韓対照言語学では「表現構造」の違いと呼び、これまで多くの研究成果が蓄積されている（林 2003; 金 2003; 堀江・プラシャント 2009も参照）。これまで頻繁に議論の対象になったのが、(i) 日本語は名詞表現を、韓国語は動詞表現を選好する、(ii) 日本語は1つの形式に多様な意味、機能が集約され、語用論的推論に委ねられる部分が大きい一方、韓国語は1つの形式にそれぞれ異なる意味、機能が振り分けられる傾向が高いため、語用論的推論の役割は少ない、ということである。例えば、日本語では「出発の日は、朝から雨だった」のような名詞表現が頻繁に用いられるのに対し、韓国語ではそのような表現は許されず、*Chwulpal-ha-nun nal-un achim-pwuthe pi-ka nayly-ess-ta*＜出発する日は、朝から雨が降った＞のように、動詞表現を用いる必要がある。

一方、日本語オノマトペは、口語性の高い文脈では、既存の文法制約に束縛されない、柔軟性の高い統語的、意味的な振る舞いを見せる (Akita 2017a; Park forthcoming; Tsujimura 2014)。そのため、日本語オノマトペでは、韓国語オノマトペに比べ、文脈に応じた様々な新奇的な表現が創作されやすく、またそのような表現に対する許容度も高い。

日韓両言語の一般語体系に見られる表現構造の違いは、(4) から (9) に示したオノマトペ名詞と相通じる部分が多い。従来、一般語体系とオノマトペ体系は、別もののように扱われることが多く、オノマトペ体系が持つ特異とされる特徴に重点が置かれる傾向が強かった。しかし、同一の言語体系に属する分、両者は多くの部分を共有していると考えられる。言語体系の表現構造の違いを、日本語オノ

マトペにおいて名詞用法を可能にする1つの要因として掲げる。

5.2.　名詞に転換する動機づけは何のか。

本来なら副詞、動詞、形容動詞として用いられるはずのものが、なぜ名詞として実現されるのか。これには、名詞という統語範疇が持つ意味的、談話語用論的特徴が手掛かりになる。名詞は、事象をモノ化する (Croft 1991)。モノ化とは、事象を明確な輪郭を持つ、1つの個体のように捉えることである。これは、ある文脈において事象の卓立した特定の側面に焦点を向けさせる効果があると考えられる。話し手は、ある状況において最も注目している特定の様態や性質を名詞用法として実現し、聞き手は、その語にまつわる百科事典的知識の中で当該文脈に最も適する要素に照らして解釈、理解する。

5.3.　一般語体系における統語転換とオノマトペ体系における統語転換は、同一のものなのか。

一般語体系における統語転換とオノマトペ体系における統語転換は、一見、異なるようにも見えるが、非常に類似した傾向を見せる。例えば、英語の名詞から動詞への転換を見ると、*angle* > He was *angling*, a *nurse* > Mary *nursed* the sick soldiers (Barcelona 2002, 2009) のように、転換前の名詞は道具や人を、転換後の動詞は行為や状況を表す。形容詞から名詞への転換でも類似の傾向が見られ、例えば、*daily* newspaper > *daily*, *roast* beef > *roast* (Barcelona 2012) のように、転換前の形容詞は状況や状態を、転換後の名詞は具体物を表す。つまり、名詞はものを特定化し、動詞や形容詞は名詞が指示する物や人を含む事象や行為全体を指す。こうした傾向は、上に例示したオノマトペ名詞や、転換前のオノマトペ動詞、形容詞でも見られる現象である。

5.4.　どのようなオノマトペが名詞転換を起こしやすいのか。

日本語オノマトペは、あらゆるものが名詞転換を起こすが、転換後の形態を見ると、制約がうかがわれる。採集されたオノマトペは、239語が完全重複形（例：「わくわく」）で、データのほぼ9割を占めている。残りの27語は語末に「り」接辞を持つもの（例：「がちゃり」）である。日本語オノマトペには、語末に促音「っ」と撥音「ん」接辞を持つもの（例：「ぱちっ」「がたん」）も存在し、その割合はそれぞれ全体の約17% (110/1,643) と約11% (101/1,643) を占めるとされる (Akita 2009: 110)。しかし、本調査のデータからはこれらの2つのタイプは全く観察されなかった。

CVCVri形と完全重複形は、語末に促音「っ」と撥音「ん」接辞を持つものに比べ、類像性が低く、語彙的統合性が高いとされる (Akita 2017b)。これらのオノマトペは、高い語彙的統合性のゆえに名詞になりやすいと考えられる。

6.　まとめ

本研究では、日本語オノマトペの中で名詞用法として用いられるものを対象に、その分布状況や意味形成の仕組みについてフレーム意味論から考察を行った。名詞オノマトペは、新奇的な意味を表す

ものが多いことから、従来は一般的ではないとされ、論証の対象外に置かれてしまう傾向が強かった。しかし、実際の言語生活の場から見ると、決して看過できない、更なる検討を進めていくべき価値が見込まれるものと考えられる。本研究の考察結果は、新奇性と統語的統合性の相関関係を示唆するとともに、オノマトペの言語的統合性に対する多面的なアプローチの重要性を示すものと言える。

■本研究は、日本学術振興会特別研究員研究奨励費（課題番号：18J12559）の助成を受けている。

＜参考文献＞

秋田喜美 (2013a)「日本語オノマトペにおける継承関係（日本語オノマトペの構文文法的分析）」『国立国語研究所日本語レキシコン共同プロジェクト研究発表会』慶應義塾大学日吉キャンパス.
秋田喜美 (2013b)「共起特性から見るオノマトペのフレーム意味論」篠原和子・宇野良子（編）『オノマトペ研究の射程ー近づく音と意味ー』, 101-115. 東京：ひつじ書房.
阿刀・星野 (1993)『擬音語擬態語使い方辞典』東京：創拓社.
林八龍 (2003)「表現構造論考」『日語日文学研究』46: 205-219.
金恩愛 (2003)「日本語の名詞志向構造 (nominal-oriented structure) と韓国語の動詞志向構造 (verbal-oriented structure)」『朝鮮学報』188: 1-83.
田守育啓・ローレンス・スコウラップ (1999)『オノマトペ：形態と意味』東京：くろしお出版.
友定賢治 (2005)『育児語彙の開く世界』大阪：和泉書院.
虎谷紀世子 (2014)「オノマトペに反映される名詞概念の意味範疇」*Kansai Lexicon Project*、大阪大学.
堀江薫・プラシャント・パルデシ (2009)『言語のタイポロジー：認知類型論のアプローチ』東京：研究社.
籾山洋介 (2014)『日本語研究のための認知言語学』東京：研究社.
游韋倫 (2014)『日中両言語における擬音語の意味と意味拡張ーフレーム意味論の観点からのアプローチー』神戸大学博士論文.
Akita, K. 2009. *A Grammar of Sound-Symbolic Words in Japanese: Theoretical Approaches to Iconic and Lexical Properties of Mimetics*. Ph.D. dissertation, Kobe University.
Akita, K. 2017a. The linguistic integration of Japanese ideophones and its typological implications. *Canadian Journal of Linguistics* 62, 2: 314-334.
Akita K. 2017b. The low iconicity of mimetic reduplication in Japanese. *Workshop on Mimetics II: New Approaches to Old Questions*. Nanzan University.
Barcelona, A. 2002. Clarifying and Applying the Notions of Metaphor and Metonymy within Cognitive Linguistics. In Dirven & Pörings, eds., *Metaphor and metonymy in comparison and contrast* Vol. 20, 207-277. Berlin/Boston: Walter de Gruyter.
Barcelona, A. 2009. Motivation of construction meaning and form: The roles of metonymy and inference. *Metonymy and metaphor in grammar 25*, 363.
Barcelona, A. 2012. Metonymy in, under and above the lexicon. *At a time of crisis: English and American studies in Spain*, 254-271.
Bauer, L. 1983. *English word-formation*. Cambridge: Cambridge University Press.
Clark, E. V., & Clark, H. H. 1979. When nouns surface as verbs. *Language* 55, 4: 767-811.
Croft, W. 1991. *Syntactic categories and grammatical relations: The cognitive organization of information*. Chicago: University of Chicago Press.
Fillmore, C. 1977. Topics in lexical semantics. In Roger W. C., ed., *Current Issues in Linguistic Theory,* 76-138. Bloomington, IN.: Indiana University Press.
Hamano 1998. *The Sound-Symbolic System of Japanese*. Tokyo: Kurosio Publishers.
Kita, S. 1997. Two-dimensional semantic analysis of Japanese mimetics. *Linguistics* 35, 2: 379-415.
Park, J. Y. 2018. Semantic Specificity and Syntactic Realization of Japanese and Korean Ideophones. In Shin Fukuda, Mary Shin Kim, and Mee-Jeong Park, eds., *Japanese/Korean Linguistics* 25 (Online version), Stanford, CA: CSLI Publications.
Park, J. Y. forthcoming. Morphosyntactic integration of ideophones in Japanese and Korean: A corpus-based analysis of spoken and written discourse. In Perniss, P., Fischer, O. & Ljungberg, C. eds., *Iconicity in Language and Literature* 16. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
Tsujimura, N. 2014. Mimetic verbs and meaning. In Rainer, F. Gardani, F., Luschützky, H. C. & Dressler, W. H. eds., *Morphology and meaning* (Current issues in Linguistic Theory 327), 303-314. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.